

Title	E・M・フォースターにおける野性的人物
Author(s)	村上, 至孝
Citation	英文学評論 (1957), 4: 110-120
Issue Date	1957-03
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/RevEL_4_110">https://doi.org/10.14989/RevEL_4_110</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## E・M・フォースターにおける野性的人物

村上至孝

E・M・フォースターは、小説家として作品の数は少ないが、偉大な作家であり、思想的にも深く、技巧的にも上手な作家である。<sup>1</sup> トリリング教授は、その『フォースター論』の開巻劈頭で、「彼は繰返し読んでも飽きることがないし、読み返すたびに教えられるものがある<sup>2</sup>」と言っているが、全く同感である。しかし、人格関係を重要視し、人や宗教の異同を超えたささやかな愛情の尊さを説く彼の思想については、一応どの批評家も論じてきているし、今は紙幅も限られているので、この小論では、主に初期の三つの作品に拠つて彼の手法のほんの一つだけを取上げ、この大作家の片鱗をうかがうに留めたい。

E・M・フォースターは、フィールディング、ディケンズ、メレディスなどの流れを汲み、典型的に英国的な作家だと言われている。英国的という意味はいろいろに分析できるであろうが、ごく大掴みに言つて、作者が読者を「楽しませつつ教える」(doctere per dulce)ものと見てよいであろう。楽しませるのであるから、ロマンティックな場面や大活劇の場面も入ってくるし、しばしば coincidence (ハーディのいわゆる 'cross casualty') も現れるし、善玉、悪玉に多少の誇張をも辞さない。また、教えるのであるから、作品を突つ放してしまわないで、その中にたえず作者自身が見えつ隠れつし、時には自己の感想や批評をはじめこみさえする。この特色は、色合の濃淡を異にしながら、フォースターの五つの小説を一貫して現れている。

さて彼は、一九〇五年、二十六歳のときの処女作『天使の恐れて踏み入らぬところ』から、六年間に四篇書き、その後十四年を距てて『インドへの道』(一九二四)を発表して以後は、今日までも小説には筆を絶つてゐる。この最後の長篇は、長い沈潜期間を経たものだけに、技巧的にも円熟しているし、題材としては、インドを舞台にとり、英国人とインド人との關係を扱つてゐるだけに、その後の世界の政治状況とも結びついて、すこぶる高く評價され、ことに同じアジア民族たる日本人に多くの示唆と深い感銘を与えるものであることも当然である。また第四の小説『ハワーズ・エンド』(一九一〇)は、それまでの三つの作品と同じ問題を扱い、同じパターンを用いながら、掘下げ方が一そう深まり、構成が一そう複雑となり、フォースターの一段の發展を示す傑作として、トリリング教授などは特に激賞してゐる。

それでは、初めの三つの作品は単なる習作にすぎないかと言うと、決してそうでなく、『ハワーズ・エンド』に比し読みごたえが弱いわけではないし、かりにフォースターが、第三の作『眺めのある部屋』(一九〇八)で筆を折つていたとしても、二十世紀前半英国小説界における彼独自の地歩は、やはり動かしがたいものになつていたであらう。フォースターは、ベネット、ゴルズワージー、ウエルズより十二、三歳年下であるが、彼が三つの作品を世に問うた頃、『財産家』(一九〇六)、『婆さん連のおしやべり』(一九〇八)、『トーノ・バンゲイ』(一九〇五)などが相前後して出ている。フォースターの題材もやはり上層中流階級の生活であり、殊に彼らの「想像力の欠除と偽善と」を暴露することに目標をおいていた。しかし彼は、他のいわゆるリアリズムに立つ作家たちと異つて、多数の人物と事件を織りませた、詳細刻明な時代の鳥瞰図を描こうとはしなかつた。複雑に組みたてられた社会機構の随所にメスを入れ、その内幕をさらけ出して全貌を明らかにしたり、この社会組織を利用して巨大な資産を築き上げてゆく人間や、逆にこの組織に縛られ圧迫されて悲惨な生活が続けてゆく人間を中心にして、社会への烈しい非難をぶちまけたりはしない。それだけにフォースターの世界は、狭いと言へばたしかに狭いし、『フォースイト家年代記』のような壮大さは

ない。しかし、フォースターは、自ら告白しているように、大文字で書かれた Truth や Faith を信じない人である。<sup>5</sup> いかにか天才といえども一個の人間の頭から生れた理論で、この浮世が住みよくなるとは考えない。彼は、思想と思想の対立よりも、もう一つその奥にある人間関係のもつれに鋭い観察を加えた。現実をよく知りぬいているだけに、却つていわゆる現実主義的文学の方法を採らなかつた。私は、フォースターの思想に触れないと言いながら早くも脱線したようであるが、彼のどんな手法も実は、彼のものの見方によつて肉づけされているのである。

フォースターは、むしろ上層中流階級を大いに憎む。彼らは豊かな富を擁して衣食住に何不自由なく、国会に代表者を送つて政治的にも英国を支配し、現状維持に汲々とし、自分たちより下、あるいは外にある人間を、軽蔑的な憐憫の眼をもつて見ている。彼らはひたすら世間態を保つことに腐心し、彼らに最も欠けているものは、正直と淳朴さである。そうした人びとが、ヘリトン夫人とその娘ハリエット、ハーバート・ペンブルックとその妹アグニス、ハニチャーチ夫人やセスル・ヴァイズなどである。この連中が外の世界と接触するとき、あたかも背鱗の棘に触られたおこぜのように、猛烈に反撥する。この連中に痛烈な皮肉を浴びせることがフォースターの一貫した目的なのであるが、彼はその方法として、多かれ少かれ野性的な人間を引張り出し、彼らと真正面から衝突させることを、この三つの小説で繰返している。こうした敵役が、それぞれジノー・カレラ、ステイヴン・ウァナム、ジョージ・エマソンである。この三人は、それぞれの小説において、ほぼ同じような、そして重要な役割を演ずる象徴的人物であるが、初めの二人と第三のジョージとは、また著しく異つた面もあり、中産階級を攻撃するフォースターのひたむきの態度にややゆとりが現れたように思われる。尤も、一般論や抽象観念を過信しないフォースターは、上層中流階級を総括的に否定しはせず、この階級に属する人びとの中からも、同情すべき人間を拾い出し、その善意に勝利を与えており、それが、フィリップ・ヘリトン、キャロライン・アボット、ステューアート・アンセル、ルーシィ・ハニチャーチである。なおこの勝利も初めの二篇で悲劇的なものが、第三の作品では喜劇的なものに転じている。

まず、『天使の恐れて踏み入らぬところ』(一九〇五)において、英国中産階級が頭をぶつける壁はイタリア人ジーノである。この男はウンブリアのモンテリアーノという小さな町に住む若者で、親は歯医者をしているのだからやはり中産階級に属してはいるが、少くとも偽善の悪徳はみじんも持たず、天真爛漫で直情径行である。ヘリントン家に縁づき、早く夫チャールズに死なれたリリアは、心の痛手を癒すためイタリア旅行に出かけ、たまたまこのジーノに出会つて、顔だちも体格も立派な彼の男振りに引きつけられ、留守家族に相談もなく結婚してしまふ。この知らせを聞いたヘリントン夫人が吃驚し、憤慨したことは言うまでもない。リリアは多分、最初チャールズと平凡な結婚をしたのであろうが、若くして未亡人となり、もしそのまま英国におれば、教会の社会奉仕事業か何かに関係して平穩な一生を過したにちがいない。だが、イタリア旅行が、彼女に一個の人間としての自覚を呼び覚まし、本来自己の属する英国中産階級を裏切つてジーノの懐に飛びこませた。それではジーノはそれほど頼もしい人物かという、まだ親の脛をかじっている青二才であり、熱情的ではあるが、楽天的な怠け者である。ヘリントン夫人の使いとして、彼にリリアと手を切らせるため出かけてきたフィリップが、初めて彼に会つたときの様子を、作者はこう書いてゐる。

カレラ氏の顔はひどくひきつっていたので、フィリップは詳しく見ることができなかった。しかし彼の手は見えた。それはあまり清潔とは言えず、てかてかと撫でつけた髪の中にもそもそ突つこんでも一向きれいなならなかつた。糊づけしたカフスも同じく清潔でなく、着ている服はと言えば、本当の英国ものとして特にこのたび新調したものであることは明らかであつた。大柄の碁盤縞で、身体にびつたり合つてさえない。ハンケチは持つてくることを忘れていたが、なくて困つてもいなかつた……。

青年は腹が空いていた。彼の奥方は彼の皿にスパゲッティを山盛り入れてやつた。このおいしい、ぬるぬるした長虫が、どんどん咽喉に飛びこんでいるとき、彼の顔はゆるみ、しばしのどかで穏やかであつた。フィリップはイタリアでこの顔を今までに百回も見ることがある。そして、それはただ美しいだけでなく、この土地に生れる

すべての人の正当な相続財産である魅力をそなえていたから、それを見て好きだと思つていた。しかし、食事の席で自分の真向いに見たくはなかつた。それは紳士の顔ではなかつた。

リアは二人の仲に出来た男の子を生み落とすすぐ死んでしまふが、その赤ん坊を引取りに英国から再びフィリップとキャロライン・アボットが来たとき、ジーノーがわが子を一所懸命に可愛がつているところに出くわす場面は有名であり、そこではジーノーも後光を背負つた聖者のように見える。しかし、それは人生における一つの貴重な瞬間として美しいのであつて、フィリップに対し二度まで暴力をふるうジーノー自身は、いかに英国中産階級が頑迷固陋の俗物であろうとも、その対抗者としては、却つて哀れむべき存在に留まる。

次の小説『いと長き旅路』(一九〇七)でこの役を引き継ぐのは、英国人ステイヴン・ウァナムである。この小説の主人公リッキイは、典型的な上層中流階級の子として、パブリック・スクールからケンブリッジ大学に学び、作家を志している青年で、大学時代の親友アンセルの感化もあつて社会の現状に不満をもつてはいるが、やがて結婚した妻アグニスと、その兄ハーバート・ペンブルックに引きずられて、行動を誤まる。彼は生れつきびつこで、この遺傳的素質を自分に残した父を憎んでいたが、母には深い愛情を傾け、厚い信頼を寄せていた。ところが皮肉なことに弟のステイヴンは、父の隠し子でなく母の不義の子であつた。つまり、彼女に横恋慕した或る農夫が、彼女の夫はロンドンに女を囲つていると教えて、ついに彼女の心をなびかせ、この道ならぬ戯れから生れた者である。リッキイは、ステイヴンを引きとつている伯母フェイリング夫人からこのことを初めて知らされたとき、ステイヴンとすぐ兄弟の名乗りをしようと思うが、妻アグニスに留められてその機を逸してしまう。

ステイヴンは、上層中流階級の偽善の生きた証拠である。醜悪なことは一切秘密裡に葬つて世間態をとりつくろい、涼しい顔で世の中を渡つてゆく連中への辛辣な諷刺である。彼の体内にはウィルトシャの農夫の血が流れており、生れてすぐフェイリング夫人の田舎の邸に引取られて、親が誰であるとも知らされずに育ち、畑仕事や庭廻りの

用事に使われていたので、鳥や獣を相手の野性的な生活を続け、腕や脚の力は強いが、精神的にはいつまでも無邪気である。アグニスを伴つてフェイリング夫人の邸を訪れたリッキキは、自分の書いた原稿をステイヴンに貸してやるが、或る夕方ステイヴンが屋根に上つてこれを読むところを、フォースターはこう記している。

ステイヴンはもはや子供じやなかつた。今では、賭のため以外には切妻壁の上には立ちあはしなかつた。煙突に小水を流しこむこともまづなかつた。猫を捕えたとき、これを女中頭の寢室へ放りこむこともめつたになかつた。だが、今なお、天気の良いときには、風呂の後で屋根に上り、日向で身体を乾かすのが好きだつた。今日は、タオルと、パイプと、リッキキの書いた物語とを持つてきていた。こいつはいつか読んでしまわなきゃならんし、六ペンスの抜刷本にはうんざりしているところだつた。傾斜した破風はほかほかしているし、彼はその上に仰向けに寝て、嬉しさに息をはずませた。椋鳥が彼を咎め、煤が彼のきれいな身体にふりかかり、空では一ひらの小さな雲が夕べの色に染められていた。

このような屈托のない生活態度の描写は、ロレンスの作風にも似通うものがあり、たしかに読者の共感を呼ぶ。しかし、美しく静かな山が、嵐の日には一変してももの凄しい形相を呈するようになり、知性に乏しい人間はひとたび激情に襲われると猛獣のように狂う。ステイヴンは酒の味を覚えると共に、次第に始末に終えなくなり、時にひどく酔払つて乱暴狼藉を働く。リッキキはこの小説の終り近くで、ついにアグニスの反対を退け、ステイヴンに自分たちは兄弟だと打明け、泥酔して踏切りで寝ている彼を救おうとして身代りになる。これは偽善に対する誠実の勝利である。そして、さきのジーンーに比べればステイヴンはよほど読者の同情を引くように描かれている。しかし、結局知性を欠いて蛮勇をふるう人間として、中産階級全体の対立者となるにはまだ不十分である。恐らくフォースターは、偽善虚飾を憎むのあまり、これらの人物の素朴さの描写において、思わず誇張に走らざるをえなかつたのであろう。

さて、第三の小説『眺めのある部屋』では、この敵役はかなり異つた形をとつて登場する。この小説もイタリアが

取入れられてあり、フォースターは『いと長き旅路』よりも先に筆をつけたと一般に推定されているが、ここに出るジョージ・エマスンが、ジーンノー、ステイーヴンと相当違つているところから見ても、作者は『いと長き旅路』を書き終えたあとで、少くとも構想を新たに書き直したものと思われる。

なるほど『眺めのある部屋』も、初めのうちはイタリアを舞台にしている。しかし、それは淋しい内陸の忘れられたような町ではなく、世界芸術史上に名高い、そして多くの英国人が訪れたり住んだりしているフィレンツェである。また、ここで女主人公ルーシィの相手となる男は、イタリア人でなく英国人であり、私生児でなくれつきとした嫡男である。しかもこの男は、彼単独よりもむしろその父と結びついていろいろ行動し、その性格を次第にはつきりさせてゆく。ジョージの父は、もと鉄道会社に長く勤めていたやはり中流階級の一員であり、それであればこそイタリア観光旅行にも出かけてきたのである。ただし、上層中流階級と下層中流階級の間には、乗り越えがたい大きな断層のあることは記憶すべきであろう。フィレンツェの同じ宿に泊り合している数人の英国人仲間から、エマスン親子は、礼儀をわきまぬ野卑な人間として疎外されているが、新しく到着したルーシィが、眺めのない部屋に不満を洩らすのを耳にし、それでは部屋を代つて上げようと申出る。ルーシィの従姉でお目付役のシャーロットは、見ず知らずの男にそうした恩義を受けることに反対するが、結局この交換は実行される。エマスン氏は、上層中流階級の生活態度に強い反感をもつており、早く妻を失つた後、独り息子のジョージを家庭の中で教育し、慣習にこだわらず虚心坦懐に行動するようにしつけた。従つてジョージは、ジーンノーやステイーヴンのように野蛮な面がなく、しかも世間慣れしないで気おくれしがちな、うぶうぶしい面をもつている。しかし、自己の感情を包み隠してごまかすことを知らないから、ルーシィに対する愛情の表示には大胆である。独りで買物に出たルーシィが、広場の一角で名画の写しを買つたとき、そばでイタリア人の喧嘩があり、刺された男の鮮血の迸りを見て失神し、たまたま通り会せたジョージが彼女を抱きとめてわれに返らせる。この瞬間ジョージの胸には彼女への熱烈な愛の火が点される。旅は平常の生



活で予想もされないことを実現させることがあるが、やがて同宿の英国人一行が打揃つて郊外へピクニックに出かけたとき、ルーシイは再びジョージに抱きかかえられて接吻を許さねばならなかつた。この場面は牧歌的な甘く和やかな調子が流れているのであるが、時は春たけなわ、一面砂子を撒いたように葎の咲乱れている崖つぶちで、独りはぐれてみんなを探しているうち足を滑らせ、危く崖下に落ちようとするところをジョージに抱きとめられるのである。<sup>10</sup>

これきりですめば、旅の行きずりのたあいもない冗談として終つてしまふのだが、舞台はルーシイの郷里ウィンディ・コーナーに移つて、いよいよ本筋に入る。彼女が母や弟の許へ帰りついてほつとしたのもほんの暫く、近くにできた新築の貸家へエマスン父子が引越してくる。しかも皮肉なことに、この家を世話したのはルーシイの許婚セスル・ヴァイズなのである。セスルは、メレディスのサー・ウイロピイを連想させる人物で、作者の扱い方は少し残酷に過ぎる感があるが、読書を愛し、音楽美術を鑑賞する観念的教養人で、女性を自己の欲する鑄型に嵌めこもうと考える、利己的な、横暴な男性である。みんながテニスに誘つても、自分は下手だからと言つて加わらない。その点ジョージは、何事にも気さくに応ずる。或る夕方テニスが終つてコートから家へ引揚げる途中、ジョージは植込の蔭で突然ルーシイを抱きとめ、二度目の接吻を与えた。ルーシイは、いやに澄ましていてその実、利己主義者であるセスルにあきたらず婚約を解消するが、といつてジョージを愛しているかどうか自分でもよく分らない。再びギリシアへでも旅に出ようと思ふが、出発間近の或る夜エマスン氏に会い、この父親の口を通して、ジョージの彼女に対する真剣な愛を聞かされるや忽ち心は決まり、ついにジョージと結婚して、思出のフィレンツェへ新婚旅行に出かける。

ジョージも世の因習にこだわらない、野性的な若者であるが、ジーノーやステイヴンのように粗暴な要素もない。むしろ、たえず父エマスン氏の力を借りて動いているようで、少々もの足りないほどである。ルーシイは、時に非礼を敢えてさせる彼の率直さが、一方において彼の人間としての弱さをもさらけ出していることに引きつけられた。或る日母と共に、通りがかりにエマスンの家の門口に立寄つたときの一節を引けば、

ジョージは答礼しなかつた。少年らしく顔を赤らめ羞かんでいた……。彼は、「ぼく、——ぼく、都合がつけばテニスに参りましょう」と言つて、家の中へ入つてしまつた。多分彼のすることは何でもルーシイの氣に入つたであらうが、彼のまごつていゝことは強く彼女の心を打つた。男たちも結局神じやなく、娘たちと同じように人間の無器用なのだ。のみならず男たちは、説明しがたい欲望に苦しんで、ひとの助けを必要とするのかもしれない。彼女のような賤けを受け、彼女のような人生の目的を宛てがわれているものには、男の弱さというもの、は、今までに知らない真実であつた。尤も彼女は、フィレンツェで、ジョージが彼女の買つた写真をアルノー川に投げこんだとき、この真実をおぼろに察したことがあつた。<sup>11</sup>

なお、前の二つの小説では、ジーノー、ステイーヴンのお蔭で大格闘の場面があつたに對し、この小説は終始おだやかであり、争いと言へば、ルーシイがセスルに婚約解消を申渡す一くさりの問答が緊張した空氣をはらむくらいである。人工のコンクリートで固めた上層中流階級の牙城を壊すために野性の小刀を持出したフォースターは、ここで戦法を変えたのであろうか。ジーノー、ステイーヴン、ジョージの系統は、第四の小説『ハワーズ・エンド』では、ロンドンのしがたないサラリーマン、レオナード・バストに受けつがれているが、バストは自然へのロマンティックな憧れをもつにすぎず、ラスキンの『ヴェニス石』を愛読し、展覧会や音楽会に乏しい財布の底をはたいて出かけるなど文学・芸術を愛して文化的生活への向上を念願している、むしろ氣の弱い人間になつてゐる。上層中流階級を罵倒するためには、その外にある素朴な象徴的人物を利用するのが大いに有効であるが、この階級を打崩すためには、彼ら自身の中で、自らの境遇に不満を抱き、これに反逆する人物が必要になる。『天使の恐れて踏み入らぬところ』におけるフィリップ、『いと長き旅路』におけるアンセルもこの傾向を宿していたが、それがルーシイに至つてはつきり表に現れている。ルーシイとジョージとの結婚は、化石化した因習に打ち克つて、個人と個人とが互いの愛情によつて結ばれたことであり、ジョージはここで、ジーノーやステイーヴンと逆に、積極的、建設的役割を果している。

『眺めのある部屋』が一見平凡な軽喜劇のように受取られるのも、一つにはこのためであろう。

フォースターは、この頃から、上層中流階級に単身ぶつかつてゆく選手を使う代りに、この階級に属しながらその弊害に毒されない、自己犠牲的な、情愛深い人物を描くことによつて、中産階級の反省を促す方法を採つたようである。ルーシィは『ハワーズ・エンド』のヘレンに受け継がれているが、このヘレンは自らの属する階級に謀反し、名誉も財産もふりすてて愛情の命ずるままに行動する。また彼女の姉マーガレットは、この小説の発展につれて次第に旧い殻を脱ぎすててゆくし、彼女にハワーズ・エンドの古い邸を遺贈したウィルコックス夫人は、世俗的な名利に超然とした慈愛深い一種の風格によつて、冥々のうちに同じ小説中の各人物によい感化を与えている。初めのうちは、上層中流階級に対するせつかちな憤りが先に立つたが、今やフォースター本来の、人格的關係に対する関心がこれに代つて作品の前面に現れ、醜い人生における善意の美しさ——それはいかにもささやかであり、また東の間に消えるものであつても、そうした善意の尊さ——を、静けくかそかな声をもつて語ろうとしたのであつた。<sup>12</sup>

『ハワーズ・エンド』の後、第一次大戦を経験し、二度インド訪問の機会をもつたフォースターは、十四年ぶりに筆をとつた第五の小説において、インド人たちを圧迫している英国中産階級精神、彼らの「未発達的心情」<sup>13</sup>を描くに当り、ウィルコックス夫人と似通つたムーア夫人を登場させ、彼女と同じく人間愛に満ちたフィールディングをこれに配し、相手方インド人の中では、医師のアジズという教養ある温厚な人物を作り出して、英国人とインド人、英國の風習とインドの風習、ヨーロッパ精神とアジア精神という、極めて広大でしかも複雑微妙な題材を、巧みにこなすことができた。この『インドへの道』では、もはや遮二無二上層中流階級にぶつかつて憎まれ口を利くのでなしに、無限に拡がり、無量の光を湛えている大空の下における、地上の人間の小さななたくな心を、静かにほぐし広げてゆくとする態度がうかがわれる。ここでは人間よりもむしろ、自然や風習が象徴的意義を担つて無言の力をふるつている。この後も伝記、論文、講演、放送などでは活躍しているにも拘らず、もはや第六の小説を書かないのも、フ

オースターの創作力がこの一篇で發揮しつくされたからであらう。

世界人類の幸福は究極において道徳、宗教の問題である。宗教といつても、キリスト教、仏教、回教といつて対立していたのではない。つまりまでも解決しない。まして政治、経済の機構がいかに整備改善されても、人間が互いに憎悪を燃しあつては、権力の争いは永久に繰返される。ステイヴン・スペンダーの言う通り、フォースターは大声叱咤することを好まず、常にかすかな囁き声で語るのであるが、<sup>14</sup>恐るべき大惨劇を自らの手で二度までも人類が繰返した二十世紀前半の歴史の体験者として、芸術家フォースターの直観に映る真実は、単なる幻想として笑殺することを許されないと思ふ。だがそれは、初めにも述べたように、小論の題目を超えた、はるかに大きな問題であり、機を改めて考察してみたいと思ふ。

(昭和三十一年十一月二十五日京大英文学大会での講演)

- 1 cf. Rex Warner: *E. M. Forster*, p. 14 'Few works are more technically skilful.'
- 2 Lionel Trilling: *E. M. Forster*, p. 7. New Directions Books, 1943.
- 3 *ibid.*, pp. 114-115.
- 4 E. M. Forster: 'Notes on the English Character' in *Abringer Harvest*, p. 3. Edward Arnold, Pocket Edition.
- 5 cf. Stephen Spender: 'Personal Relations and Public Powers' in *The Creative Element*, pp. 77-79.
- 6 cf. *ibid.*, p. 82, also Trilling, *op. cit.*, p. 19.
- 7 E. M. Forster: *Where Angels Fear to Tread*, pp. 36-37. Edward Arnold, Pocket Edition.
- 8 *ibid.*, pp. 154-158.
- 9 E. M. Forster: *The Longest Journey*, p. 138. Edward Arnold, Pocket Edition.
- 10 E. M. Forster: *A Room with a View*, pp. 74-75. Penguin Books.
- 11 *ibid.*, p. 163.
- 12 cf. G. S. Fraser: *The Modern Writer and his World*, p. 68.
- 13 E. M. Forster: 'Notes on the English Character' in *op. cit.*, p. 5.
- 14 Stephen Spender: 'Personal Powers and Public Relations' in *op. cit.*, p. 78.

附記 本稿の徳田隆 John Harvey: *Imagination and Moral Theme in E. M. Forster's The Longest Journey (Essays in Criticism, VI, 4)* に接したが、ノースーマン・マヤマムの性格について同書四三二頁を参照せられたら。